

茶の湯文化学会会報 No.9

第9号/1996年4月25日 〒606 京都市左京区下鴨森本町15 TEL.075-702-9270
発行 茶の湯文化学会 生産開発科学研究所内 FAX.075-702-9314

一九九三年六月に、エコファーム・システム・アンド・リソーセス株式会社から同社のパンダナン島で漁



写真提供：ECOFARM SYSTEMS AND RESOURCES, INC./JEWELMER INTERNATIONAL CORPORATION

堺市立埋蔵文化センター 森村健一

フィリピン・パンダナン島沖沈没船引き揚げ陶磁器



床開発計画中に沈没船と多数の陶磁器を発見したとフィリピン国立博物館に報告があった。国立博物館は早

図1 沈没船発見現場と景徳鎮窯青花双鳳凰文盤

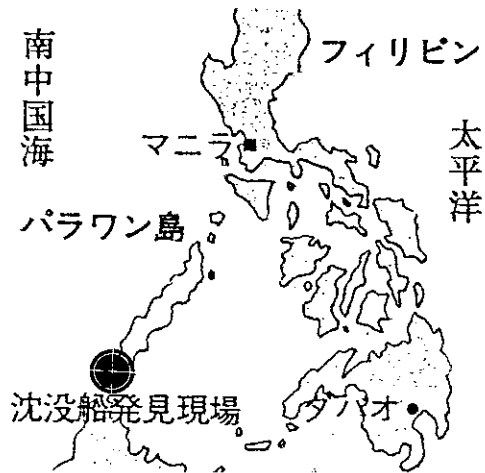


図2 沈没船発見現場

速、水中考古学者達によって同島北西部の沖合二五〇m地点で水深四〇mに沈没船を確認した(図1)。本格的な調査は、国立博物館のスタッフによって一九九五年二月十七日から五月十七日まで実施された。引き揚げられた品々は、総数四八二二点に及び、中国龍泉窯青磁、景德鎮窯青花、タイ・スコタイ窯、ベトナム青花、ゴーサイン窯、ゴークイメイ窯、移動式煮沸用カマド、大中小サイズの五個の銅鑼、地中海産と思われる珊瑚首飾、二門の大砲を含んでいた。松本哲神戸商船大学教授の見解によると沈没船は、中国船より東南アジア船の可能性が高いとされている。



図3 ベトナム青花四耳壺と景德鎮窯青花牡丹文小壺

引き揚げられた陶磁器の内でも最も貴重なのは、一四世紀中葉と考えられる元青花大鉢で口径三〇cm、器高一四cmである。文様は水色と紺色系コバルトを使い分けており、他例の蓮池水禽文に対し本例の文様は鳳凰麒麟で織



図4 景德鎮之青花鳳凰麒麟文大鉢

細に構成されている(図4)。この構図の類例としては、大英博物館所蔵の青花牡丹唐草文双耳壺(h11四七・八cm)の肩部文様がある。同タイプで年代の明白な出土例としては、中国江蘇省南京市葉氏墓(永樂一六年—一四一八年没)の青花大鉢のみである。引き揚げ点数の少ない景德鎮窯青花盤(図1)

は、一五世紀前半—中葉の所産で沈没年代を示す積極的な資料とは言い難い。朱伯謙先生によると引き揚げられた龍泉窯青磁稜花瓶は、江西省永修縣魏源墓—正統九年(一四四四没)のそれに類似するとの教示を受けた。又、景德鎮窯青花牡丹文小壺(図3)もは、プロポーシオン・文様構図において近似する資料として、正統二年(一四二七)没と考察されている。江西省新建縣朱盤斌墓の青花牡丹唐草文有蓋壺(四個体)がある。上記の二例と我国の遺跡から出土した青花、青磁から判断してこの沈

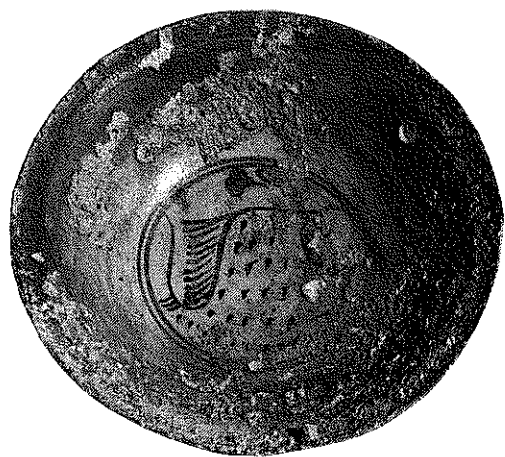


図6 タイ・スコタイ窯鉄絵魚文鉢

没船は、一五世紀中葉から後半にかけて嵐によって難破したと考えられる。

沈没船の引き揚げ調査での最大の目的、成果は、貿易システムの解明にある。即ち『歴代宝案』という文献によって、一五世紀の東・東南アジア諸国間の貿易は、琉球国が明に代る中核貿易国の役目を果たし、国家間貿易を確立していたことは明確化されていたが、この沈没船によって実証された。その考古学的例証としては、タイ・ベトナム陶磁器がフィリピン、沖縄グスク、唐津市菜畑松岡寺遺跡、

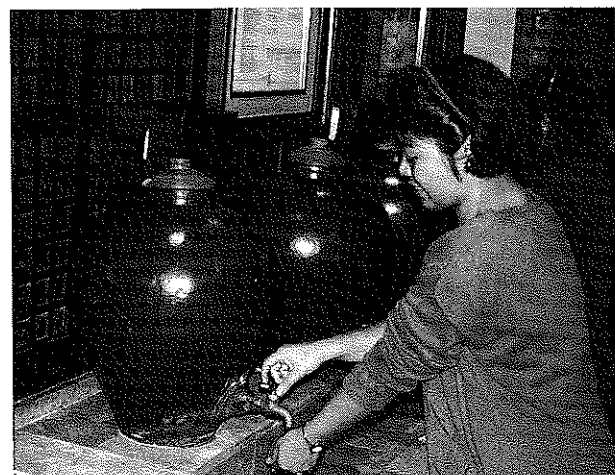


図7 フィリピンでの水壺使用例

博多遺跡群、堺環濠都市遺跡から出土している事が上げられ、前述の貿易ルートに乗って輸入された事を物語っている。蛇足にはなるが、(図1)にみられる光景は、福建・広東産とされるいわゆる「呂宋壺」の底部付近に於いて時々穿孔を補修した例を見受けられるが、それはこの壺の使用例を見ればうなずける。尚、この引き揚げられた陶磁器は一九九七年に日本で展示される計画が進行中である。



図5 ベトナム青花花文盤

理事会報告

平成七年度第三回理事会は、研究会に先だつて、二月十七日(土)午前十一時半より、東京鳥居坂下の国際文化会館において、会長以下十六名の理事の出席を得て行われた。主な議題は左の通り。

平成八年度事業案

平成八年度総会

平成八年度大会

研究会

会報

会誌

理事会

会誌レフェリー制の実施について

委員委嘱について

その他

それぞれの詳しい内容については、会報・会誌などにおいてお知らせしますので、それをご覧ください。

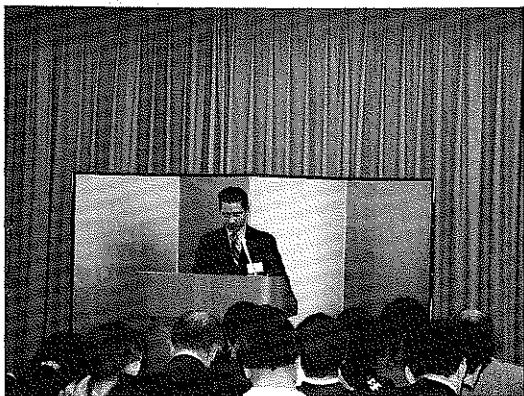
第四回 研究会報告

平成八年二月十七日、午後一時より、東京都港区の国際文化会館において、第四回研究会が開催された。東京で行われる初めての研究会とあつて、参加者が多く、当日は朝から雪が降り続いたにもかかわらず、その数は、一七二名にも上った。

中村会長の挨拶のあと、永田尚樹氏の「室町時代喫茶史に関する一考察」、竹本千鶴氏の「織田信長の『名物狩り』について」、矢野夏

茶の湯文化学会 第4回 研究発表会

平成8年2月17日



永田尚樹氏の発表

子氏の「俳諧の茶の湯」の興行の実態」の三本の研究報告が行われた。今回は、それぞれ五十分の研究報告のあと、その分野の研究者に十分ほどのコメントをいただき、そのあとで質疑応答を行った。最後に林屋副会長の挨拶をもって、研究会は終了した。

三氏の発表内容及びそれに対するコメントの概略は次のとおり。

発表1

室町時代喫茶史に関する一考察

― 禅院茶礼の書院座敷への移行 ―

永田尚樹

草庵茶の湯の母体の一つと考えられる、足利將軍家の「書院の茶」は、「北山と東山の間」、つまり応永十五年から、応仁元年の間に、禅宗寺院の茶礼を母胎として、成立したとされている。しかし、足利義教や義政の時期の史料に、「書院の茶」の具体的な記述例は見いだせない。そこで、当報告では、「北山と東山の間」に禅院茶礼の書院会所座敷への移行は、求められるか、もし求められるとすれば、どのような形態であったかを、検討したい。

『蔭涼軒日録』に見られる、当該期の正月二十五日の、室町將軍邸会所での恒例行事、

「御所御煎点」は、足利義持の晩年に、義満の故事に倣って創始され、義教期に確立し、義政期に充実し、応仁の乱で廃絶した。この「御所御煎点」は、唐物などを飾った將軍邸会所において、禅僧の御相伴衆を招き、茶礼を含む禅院飲食儀礼たる「煎点」をもてなす行事である。これこそが、禅院茶礼の書院会所座敷への移行の実態であろう。

「御所御煎点」は、整然と座敷飾を施し、客を鉤状に座らせ、豪華な器を用い、別所で点てられた茶を運び込むという饗応方式を、禅院の儀礼をもととして創作したものと見ることが出来る。しかし、それは、あくまでも、禅宗僧侶を対象としたもので、俗人相互間のものではなかった。したがって、いわゆる「書院の茶」も、この例で見るとは、やはり、武家・公家といった俗人の間で催されるべき喫茶形態ではなかったはずである。

〔コメント〕

中村利則

禅院の茶礼の書院への推移を、文献的に追求した有意義な発表であるが、次の問題点が残る。宗教色の強い「煎点」のみを取り上げて論ずるのは危険であり、民間の茶礼も既に

成立していたと考えてよい。また、茶の発展も、一元的に考えるのではなく、表の茶礼の他に、並行して、裏向きの茶が独自の展開を遂げていたことを見落としてはならない。

(なお、質疑応答の中で、既に成立していた世俗的な書院の茶が、禅院茶礼を取り込んだと見るべきではないか、禅院関係の資料だけで論じると循環論法になる、との指摘がなされた。)

発表2

織田信長の「名物狩り」について

竹本千鶴

織田信長の茶の湯といえば、「名物狩り」と「御茶湯御政道」が連想されるが、その実像はまだ漠然としている。ここでは、特に「名物狩り」の具体的なイメージを描きたい。

「名物狩り」の語は、信長が名物茶器を強権をもって一斉収集したことについて、昭和三十七年頃から使われている言葉であり、その意義としては、論功行賞のための財産作りとする説と、名物は信長への服属のしるしとする説が行われている。

中世社会を「場」から読み解く空間論の先行研究を参考として考えると、信長の主催した茶会、つまり茶湯による饗応の場には、「名



竹本千鶴氏の発表

物狩り」の産物が多く至礼えられており、「名物狩り」は、天正元年以降の「信長様御会」の準備であったととらえられる。

確認できる百九十八種の名物を分析すると、

A. 織田政権への服従を表明し「進上」されたもの(27)。

B. 敵対勢力から降伏・和睦の品として到来したもの(16)。

C. 信長が要求し、場合により代価を払ったもの(21)。

D. 家臣が信長のために調達したもの(1)。

E. 織田家伝来の名物(3)となる。

信長の「上様御会」の場では、これらの名物を用いることで、自らの政権の性格を客に示し、迎合を要求したと考えられる。つまり、信長の名物収集は、強権的な「名物狩り」ではなく、茶会を政治的に活用するために、「政治的調度品」としての名物を厳選して集めたものであったといえる。



矢野夏子氏の発表

「コメント」

矢部誠一郎

いわゆる「名物狩り」が、単に強権的な物ではなかった事を、具体的な例で明確化したことは評価に値する。ただ、名物という概念自体不明確なものであり、信長が名物として意識しなくても、信長が集めたことで価値の出たこともあったのではないかと、また、政治的な面を協調されているが、美術的な価値を認めて、純粹に集めたものもあるはずで、文化が政治的に利用されるだけとは限らないだろう。(なお、質疑応答の中で、政治的機能としては、茶器の下賜をより重視するべきであるという指摘がなされた。)

発表3

「俳諧の茶の湯」の興行の実態

―「むかし合」所収「夕兎の」の巻を中心に―
矢野夏子

「俳諧の茶の湯」は、茶事の進行と俳諧の興行を融合した茶会の一形式であり、元禄期より昭和に至るまで行われていたことが、先学により明らかにされている。

茶事の進行に合わせて巻かれた連句としては、井上士朗編『むかし合』（寛政八年刊）に

収められている半歌仙、「夕兎の」の巻が、現存するもつとも早い時期のものである。

この巻は、茶会記と俳諧の懐紙とを融合した形で記録されており、茶事の進行に合わせて、俳諧の興行が行われたことが、具体的に詳細に読み取れる。例えば、待合に亭主が姿を現す以前から、発句を乱箱に入れて出しておくなど、茶事と俳諧が、互いに邪魔をしないで進行するための、亭主の配慮が随所に見られるのが特徴である。また、挨拶の性格を持った句が多く、特に亭主は、場の展開に合わせて、挨拶の句を詠んでいる。他の史料と併せて考えても、このような特徴は確認でき、「俳諧の茶の湯」が完成した形態を持っていたことがわかる。

「コメント」

戸田勝久

元禄五年に芭蕉は、支梁に招かれて、「口切に」と呼ばれる歌仙を巻いており、口切の茶事であろうといわれているが、この茶事がどう進行したかは分かっていない。「夕兎の」は、半歌仙であり、歌仙と茶事をどう融合させたかは謎である。本発表は、佐々木三味氏の『お茶事』で紹介されていることの周辺を扱って、有益である。

「新刊紹介」

『千利休の創意』

矢部良明著

茶の湯に関わる者にとって千利休とその活動は最も興味をひかれる事柄の一つだろう。それだけに研究書も多く、村井康彦氏による『千利休』（NHK出版）などは、文献を元にした利休研究の代表的な著作としてもよいだろう。

これに対して本書は、「文献史料ではなく実際に利休が創意を働かした文物」を通して利休を理解しようとするものである。それは著者が美術史（陶磁史）を専門とする研究者である事にもよる。すでに日本や中国陶磁に関する著作を上梓されているのは、筆者のよって立つ所をよく示しているよう。内容は以下の五章からなっている。

一、新たな茶湯道具と理念の登場を述べる。

利休前史といえようか。『山上宗二記』の新たな位置付けを明らかにし、茶道具がそれまでとは違って黒を基調とし始めた時期であるとする。

二、豊臣秀吉、津田宗及らの名物茶道具を中心とする本数寄と、これを持たない佗数寄の出現を説く。

美術館案内

畠山記念館

遠州の数寄道具

～六月十六日まで

MOA美術館

茶の湯の美術展

～五月二十二日まで

石川県立美術館

仙叟宗室―人と茶の湯

～五月十九日まで

北村美術館

追憶の茶・風炉

～六月七日まで

野村美術館

春・夏の茶事

～六月十六日まで

香雪美術館

茶道具の華・茶碗と茶杓

～七月七日まで

姫路市立美術館

茶の湯の名碗

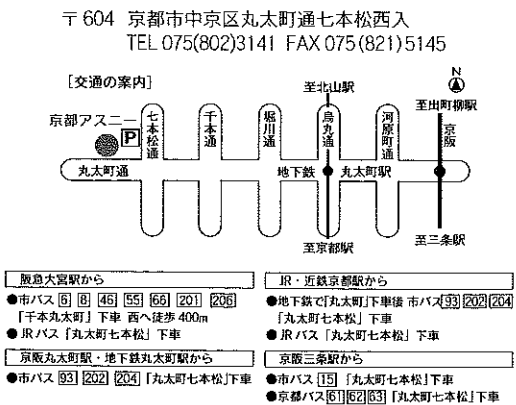
～五月二十六日まで

総会のお知らせ

平成八年度総会を左記の通り開催します。

日時 平成八年五月二十六日(日)
場所 京都アスニー(案内地図参照)

なお当日は、総会終了後にシンポジウムを予定しておりますが、詳しくは追って発送致します。総会案内状をご覧ください。



研究会予告

平成八年度第一回(通算第五回)研究会は、名古屋で開催致します。皆さんの参加をお待ちしております。

発表内容など詳しくは、別にお送りする案内をご覧ください。

日時 平成八年七月七日(日)
午後一時半～四時半
場所 徳川美術館講堂

名古屋市中区徳川町一〇一七
TEL〇五二一九三五―二六二二

発表者の募集

大会・研究会における発表者を募集いたします。大会は一題につき報告二十分・質疑応答十分、研究会は同六十分・三十分程度です。発表を希望される方は、事務局までご連絡ください。応募される方は八百字程度の梗概と研究会・大会応募の別を明記して、事務局へ提出して下さい。

後記

*本号は森村健一氏から、三年ほど前にフィリピンで見られた沈船に積載されていた陶磁器についての報告を寄稿いただきました。森村氏からは、ここに掲載した他にも多数の写真を提供していただきましたが、紙面の都合でその全部を掲載できなかったことが残念です。文中にもありますように、引き上げられた陶磁器は、来年日本でも公開される予定とのことで、おおいに期待されます。

*会誌第三号は、現在校正作業を行っており、近々お手元にお届けすることができそうです。第四号も今年度中の発行をめざしております。*年度が代わりましたので、会費の納入をお願い致します。振替番号と名義は
〇一〇二〇―四一九四二六茶の湯文化学会
です。郵便局で用紙をご請求のうえ、お払い込みください。

*大会・研究会での発表とは別に、会誌の原稿も募集しております。研究・研究手帳・翻刻など、どしどし応募してください。応募要項は会誌の末に掲載しております。
また会報への寄稿もお待ちしております。